

人文知探訪プログラム 備前長船山鳥毛レポート

令和5年12月9日(土)開催



① 備前長船刀剣博物館

P 3



② 山鳥毛 見学

P12



③ 鞆負神社

P17



④ 記念撮影

P23



⑤ 長船サービスエリア昼食、対談

P24

はじめに

令和5年12月9日（土）晴れ

刀剣の里 長船で先人の叡智を学ぶ

～国宝 山鳥毛（太刀無名一文字）谷一林原美術館長の解説で回る～
人文知探訪プログラムを実施しました。

- 一般財団法人林原美術館 館長 谷一尚氏
- 瀬戸内市 市長 武久顕也氏
- 備前長船刀剣博物館 館長 塩田勇氏、学芸員 杉原賢治氏
- 鞆負神社 宮司 高原家直氏

からご高話をいただき、備前長船刀剣博物館、鞆負神社を探訪しました。

今回は企画委員含め27名が参加しました。

JR岡山駅、長船駅、長船サービスエリア各所で集合

9 : 4 5 探訪プログラム開催

博物館入館の前に、備前長船刀剣博物館の塩田館長、杉原学芸員、瀬戸内市の三浦副市長、谷一林原美術館長からご挨拶を頂戴しました。

また、本日の探訪プログラムについて企画委員代表の小林氏から開催の挨拶がありました。

小林氏「本日は山鳥毛の探訪プログラムにご参加いただきありがとうございます。今回は、今年最後の探訪プログラムです。備前長船刀剣博物館で山鳥毛の特別展示に合わせて探訪企画を実施することになりました。山鳥毛見学、鞆負神社の神社刀の奉納、武久瀬戸内市長と谷一林原美術館長との対談等を予定しています。今回も谷一館長の楽しいトークで歴史や背景を学んでいただく機会になれば幸いです。今日一日楽しんで下さい。



10:00 備前長船刀剣博物館 展示パネル

館内では備前長船刀剣博物館の塩田館長と杉原学芸員に案内していただきました。

杉原学芸員「本日はたくさんの方にお越しいただきまして、ありがとうございます。それでは早速、刀剣について解説いたしますね。まずはこちらのパネルをご覧ください。刀の始まりについて説明いたします。地図を見ていただきますと、中国山地は岡山県、兵庫県から山口県のあたりまで伸びていますね。この中国山地から実はたくさんの鉄が採れていまして、特に岡山県と、それから反対側の島根県辺りがたくさん鉄が採れた地域になります。

岡山と鉄とは、非常にゆかりが深いものになります。一説には、桃太郎のお話がありますよね。桃太郎の話、つまり岡山県側のお話をする元だったのが鬼羅伝説と言われているものです。あれは実は、大和朝廷が吉備の国にあった鉄を奪ったのではないかというお話で、勝った者が歴史を書きますから、大和側からしたら敵を退治したというお話になりますが、吉備側からしたら奪われたというお話になります。そのような時代から鉄との関係が見てとれますね。

それから、万葉集などに出てくる吉備の枕言葉と言われているもので“まがねふく”があります。まがね、とは鉄のことをさします。奈良時代には吉備国の税金として、いわゆる鉄と言われているもので納税することになったことから読み取れるように、岡山県というのは、鉄がたくさん採れた地域になります。そういう地盤があるので、鉄製品と言われているものが必然的にたくさん作られるようになりました。

ここに展示していますのが日本刀の主な種類になります。日本刀とは、基本的には太刀、そして刀、脇差と短刀という四つの種類が主になります。実は長さが違うのです。太刀と刀は60センチ以上のもの。そして脇差は60センチから30センチの間、30センチ未満のものを短刀と言います。今回は短刀のことは置いておきますが、太刀と刀と脇差は、実は身分によって所有できる者が異なります。元々、刀は武器でありながら、服飾品としても作られたものになります。



太刀が一番偉い人が持つものです。偉い人とは権力を持っている人で、いわゆる天皇。ピラミッドの身分制度でその頂点の人と、貴族と言われている人たちが本来持っていたものです。聖徳太子の像を見ていただければわかりますけれども、腰になにかぶら下がっていますよね。あれが元々の太刀と言われているものになります。天皇に謁見するためには、刀を腰にぶら下げておかないと宮中に入れなのです。誰でもかかれでも宮中に入れるわけじゃありませんし、天皇も、1万人ほどの配下がいきましたが1人1人の名前は覚えていないので門番さんが顔パスできるように、ということです。そのために太刀は服飾品として最初は作られていきました。その後で作られたのがこの打刀と言われている、いわゆる刀と言われているもので、これは戦闘にも使えますけれども、身分の低い人も持てるように作られたものです。さらにこの脇差は、もっと下の身分の者ですね。かつてはどの身分の人たちも、日本刀のどれかは持っていたのです。天皇は太刀を持っていましたし、農民の人たちも小さな刀を持っていました。それがわかりやすく描かれているのが、こちらにある国宝の一遍上人絵伝です。簡単に説明させていただきます」

杉原学芸員「この絵がここの地域を描いたものということで展示をしています。本物は国宝ですのでこれは写しですね。一遍上人っていう鎌倉時代のお坊さんの商売を描いた絵巻物で、たまたま一遍上人が福岡と言われているこの地域に来たときのことが描かれています。

これを見ていただいたら街の賑わいを見ていただけるのですが、うちの博物館としてもっとも見ていただきたいところは、実は街の賑わいではなくて、この時代、身分によって持っている刀が違うということです。主人公の一遍上人はお坊さんで当然刀は持っていません。この中で刀を持っている人は3人しかいません。

この絵の中で最も身分が高い人はこの人、この人の家来がこちら、その次の家来はこの人ですけれども、見ていただければわかる通り、この人だけが太刀、次の身分の人は打刀を持っています。ただこの時代、まだ打刀は完全に発明されていませんので太刀の容姿のものを打刀ふうに持っています。さらに、次の身分の人たちは脇差。それ以外の人たちは、誰1人刀がない。身分によって持てるものが決まっていたというようなことが読み取れるのです。刀は身分を証明するものというのが最初ですね。それプラス、権力の象徴とか、力の源っていう意味はありますから、神社や仏閣に奉納されたという形になります。

後の時代になってくると、どの身分のひとも脇差までは持っていることが可能になるので、実は日本のことわざの多くに刀に関係する言葉があります。反りが合わない、元の鞘に戻る、真剣勝負、しのぎを削る、相槌をうつ。これだけ多くの言葉があるのは、多くの人たちが刀を持っていたことと繋がっています」

10 : 15 刀剣展示室



杉原学芸員「今回の展示は新収蔵品展という形で展示をさせていただいております。平成29年から当館に収蔵された刀が展示してあります。うちの博物館、購入品は非常に少ないのです。寄贈品と寄託品で館蔵品を保っていますが、その中の一部を今回は紹介させていただくという形で展示しております。こちらの部分に一振りだけ寄託品を展示させていただいております。寄託も受付していますよということを知っていただきたいので。

刀に関する見方ですが、一つはこの全体の姿ですね。それから彫りや長さ、形、それから幅の広さによって作られた時代が変わってきます。それを見るといつの時代に作られたかがわかります。あとは刃文などで地域を表しています。一子相伝に近い形で刃文とか刀の文様はつくられていますので、変な刃文になると破門になってしまう。ですから刃文で地域性がわかってくるということです。

今回、こちらは皆様が知っている刀の一振りだと思われる”村正”を展示しています。いわゆる妖刀村正というもので、持ち主も伝承では真田幸村が持っていたと言われているものを展示しています。その次のここから後ろの方が寄贈品という形ですね。

こちらに展示しているのは現代刀からで、それから上階に行くにつれてだんだん時代が古くなっていきます。最終的にはあの山鳥毛があります。あれは令和2年にコレクションに加わったものになります。山鳥毛が一番古い刀で、鎌倉時代の中期です。

この展示室で見たいものはたくさんありますが、特に見たいのはこちらの貞勝の作品です。

先ほど天皇のお話が出ましたが、この貞勝は実はお父さんが技芸員という、明治時代の人間国宝と言われたような人物でした。明治時代に刀関係で人間国宝のような形で認定されたのは実は2人だけです。宮本包則と月山禎一、その貞一の息子さんになります。

月山貞勝と、お父さんの貞一自身が明治天皇に非常に好かれまして、いわゆる天皇御用達と言われるような刀鍛冶になります。天皇に命令されて、たとえば伊勢神宮の宝を作ってほしいというような形でよく命を受けていました。

今回展示しているものも、実は大正天皇から貞勝が命令を受けて作ったものになります。これはある海軍の人が功績をあげて、刀を下賜されたものになります。貞勝は非常に優れた刀鍛冶でした。この刀、ここに恩賜と彫られていますね。当時、大正天皇は現人神ですから、神からいただいたものということで大切に持たれていたのでしょう。ちなみに、なぜ海軍の刀とわかるのか。軍刀と言われているものは珍しくはありません。この形は珍しい刀ですけれども、軍刀自体は珍しくありません。ただ、軍刀も海軍は黒い色、陸軍は茶色と明確に分けられていました。軍刀の色を見れば、どちらに所属していたかわかります。この鞘の色で分かるのです。刀の見方というのは刀身だけを見るのではなくて、この鞘も着目していただければ、どういう意図で作られたのかなというのがわかります」

杉原学芸員「もう一つ見ていただきたいのがこちらですね。これが祐包という人になります。実は先ほど、長船派が一番日本で長く続いた一派という話をしましたけれども、この祐包自身も幕末、長船の刀鍛冶になりまして、これから皆さんも行かれると思いますが靱負神社の神前でよく刀を打っていた人になります。これは神前で打ったものではないのですが、この人の作品がよく靱負神社で作られていたというお話です。この人自身が幕末の名工と言われておりまして、この人の隣にあるのが祐永、この人らが幕末の名工となりまして全国でこの刃文を、いわゆる菊の花によく似た重花丁子と言われているものがありますが、この刃文を全国的に流行らせた、すごい人になるのです。

実は岡山って刀の一大生産地であるのと同時に、刀に関しては一番の流行の発信地でもあったのです。なので、これ以降、現代作家さんも含まれますけれども、全くこれと同じ刃文を焼いているのです。これがすごく好まれたのです。ものすごい技術ですよ。



この丁子という刃文を創始したのが備前って言われています。この地域では互の目も創始されたと言われているので、数ある刃文の中で最も好まれている丁子と、それから互の目が実はここで作られたものです。

なおかつ、中世の段階で刀は五つの産地が有名になるのですが、一つは備前、ここ岡山県ですね。そして山城と大和、相模と美濃と言われています。実は備前は、相模国の相州伝でいわゆる正宗と言われる人の師匠の師匠が実は備前国から行っていたという形で、相州伝の創始の手伝いをした人になります。その技術をもって、後に信長の時代に美濃でも関で美濃伝と言われるものが創始されますが、それも実は備前の影響を受けています。備前から枝分かれしていったということが多くわかります。

備前は刀だけではなくて、ここに展示しておりますがいわゆる銃と呼ばれるものも作られています。銃は筒の部分に玉鋼で作られています。刀剣と全く同じわけではないですが、ほぼ同じような形になります。もちろん銃に関しては当然実用性を重視して、武器として作られました。ですが、刀は実用品としてではないのです。皆様の夢を壊したら申し訳ないですが、刀って斬れません。上手い人がすれば鉄兜も斬れますが、下手な人だと腕一つ斬れないのです。よく映画とかでバンバン斬っていますけれども現実にはできません。しかも刀は柔らかい。本当に夢を壊して申し訳ないですけどもステンレスの包丁の方が斬れます。では、何のために作られたかっていうとやはり美術品ですよ。それと服飾品としての側面が非常に強い。持ち主の格を示すものということ。ですので、ここにある刀の多くが人を斬ったことがない刀です」

谷一館長「人を斬った刀の方がいいっていう人もいらっしゃいますよね。江戸時代の試し切りの資料が林原美術館にはたくさんあります。刑死した遺体を野原に持ってきて、3体並べて上から斬るとかそういうのはあるけれど、それは実用の刀です。美術刀剣ではない。こちらは要するに格付けのための刀ですから」

杉原学芸員「虎徹という人は、マーケティングが上手くないと江戸時代の刀は売れないので、人をこれだけ斬れますという切れ味を銘に書いています。虎徹の刀については、基本全部試し斬りしています」

谷一館長「実用の刀と美術品の刀では全く違いますよね」

杉原学芸員「ここから上階にご案内いたします。刃が上に向いているものに関しては歩いて戦うもので、いわゆる打刀です。刃を下に向けているものに関しては、太刀で身分の高い人が持てるものです。なおかつ馬に乗って使いますね。身分の高い人は馬で移動しますから」



谷一館長「ちなみに最も偉い人は牛車とか輿に乗ってくるので別の話になります。今川義元が輿に乗ってきて討たれるのです。彼らになると輿で移動する」

塩田館長「今回の山鳥毛については太刀ですけども反対に向けています。刃文をみせるためですね」

谷一館長「いつもは表側しか見せていませんので、裏側が見えるようにわざと逆の向きで展示されていますね」

杉原学芸員「そうですね。刀は表と裏が揃う場合と揃わない場合があります。時代によってそれが変わってはくるのですが、山鳥毛が作られた時代は基本的に表と裏が揃わないのです。ただ、山鳥毛は珍しくほとんど揃っているのでもうそこを見たいということなので今回は特別に裏を展示しています。それではご自由にご覧ください」

10:20 山鳥毛 見学



10 : 45 山鳥毛 見学後

杉原学芸員「山鳥毛の売りと言われているものが二つありまして、一つはその名を冠した刃文。先ほど丁子の話をいたしましたけれども、この刃文がいわゆるヤマドリの羽によく似ている、華やかな姿からそのまま名がついたのが見どころの一つです。

もう一つは、姿と言われます刀自身がほぼ出来た当時の姿を残していること。大体600年から700年前に作られたものになりますけれども、それぐらいの時期に作られたものは、多くが研いで減っているのです。刀のここが厚さになります。この厚さは、実は3万3000枚の層が入っているのです。折返し鍛錬と言われるもので、ここに約3万3000枚の層が本来は入っているはずなのです。この層が1回研ぐと大体1000枚ぐらい減っていきます。そうすると刀はだんだん痩せていきますよね。そうすると見るも無残な姿になってしまう。国宝の中でも、三日月宗近と言われている名刀があります。実は出来た当時は三日月ではなかったはずなのです。それがだんだん研いでいって三日月と言われている部分が出てくる。それが出てきたので三日月なのです。研いでいくとだんだん中の素材が出てくる。ただ、山鳥毛に関してはそれが出ていません。なおかつ、元々太刀で作られていますので、非常に重たいのです。本当は最初に説明すればよかったのですが、樋と言われるこの部分に溝を彫っていましたよね。あれは実は刀を軽くするために彫られるのですが、この山鳥毛は、出来た後に樋を彫っているということがわかります。どうしてそんなことがわかるかというと、丁子の頭って言われている部分が樋によって削られています。丁子を焼いた後に樋を彫ったということがわかります。ですから、出来た当初はもっと重くて、樋がなくて、しっかりした形だったと思います。ただ、持ち主が重いのを軽くするために樋を彫ったのでしょう。もちろん樋を彫ると軽くなるのに加えて、強くするということがあります。いわゆる電車のレールを想像していただければわかりますけれどもH型になっていますよね。H溝って言われますが、あれの原理と同じように、真ん中を削ることによって強度をさらに増すという形がありますので刀もその原理で作られています。そういう意図もあるでしょうが、最も大きな理由としては軽くすることでしたでしょうね」

杉原学芸員「この刀が備前刀の最高峰と言われている所以に関しましては、出来た当時の姿を保っていることが最も重要なこととなります。これが途切れるとただの国宝となります。私たちや、……あちらに瀬戸内市長がいらっしゃいましたね」

武久市長「本日はありがとうございます。たくさんの方に山鳥毛を見ていただけて嬉しいです」

杉原学芸員「瀬戸内市で末永くこの刀を守っていくためには、この姿を永遠に残しておく必要があります。ですから、大変申し訳ないのですが年間60日という制限をかけさせていただいています。この刀を永遠に守りたいということですね。取り留めない話になりましたけれども、ご清聴ありがとうございました」



谷一館長からは、この地域の風習について一遍上人絵伝を参考に解説をいただきました。

こちらの絵は国宝ですが本物はもっと小さいのです。引き延ばしてくれていて大変見やすいですね。備前福岡についてよく描かれています。刀が3種類あるのはその通りです。脇差の人は本来弓を番えていたのがちょうど消えているのですね。太刀を持っている武士は備前一宮の宮司の息子で、奥さんが留守の間に一遍上人に誑かされて踊り念仏に入信してしまった。剃髪した場面も出てきます。備前一宮は今の一宮駅ではなくて、安仁神社のあたりが備前一宮と言われていたそうです。最終的には、なんと夫婦そろって剃髪してしまうのです。

谷一館長 面白いのが、転がっている備前焼を低いところに並べていますが、これは備前焼の甕を売っているところ。こっちの備前焼は立っているでしょう。こちらは酒か油が中に入っていて量り売りして売っているのです。

魚屋がいて、天秤棒に魚をかけていますし、ここでは魚をさばいていますね。川魚で大きな鯉だろうと思います。ここではお米を売っているし、お米屋の主人は部下に売らせておいて自分は寝ている姿が描かれています。ここは反物を売っていますね。これ、さし銭といって100枚の中国銭のことです。日本で実際にお金を作ると銅銭ではものすごくコストがかかるので当時は中国の宋銭などを輸入してきた方が遥かに安い。だから当時は中国銭を使うのです。それで、1枚1枚でももちろん使えますが、100枚単位にして紐を通して、1単位として使っていた。実際には100枚ではなくって、96枚から97枚ぐらいで1つとしたようでね。さし銭でも、103枚とか105枚の地域もある。東北の遠くまで行くと、100を超えるようです。中国地方とかは97枚程度が多かったみたいです。こちらは、船に乗る人が自分の履物をここへ預けて高下駄に変えているのですよ。これ実はですね。当時トイレが平坦地なのです。それでかがむと、お尻なり着物に汚物がつくでしょう。ですから高下駄を買っているわけではなく、お金を出して公衆トイレ用の高下駄を借りているのです。

高下駄をもっていかれると困るから、自分の履物と高下駄を交換して、お金をもらって、この裏で用を足す。ということまでわかる絵です。お米を運んでいる場面が出てくるし、吉井川の水運がちゃんと出ているところもあります。備前焼と備前刀がここで描かれているというのも意味深いですよ。



また、吉備と関わりある言葉“まがねふく“についても補足いただきました。

谷一館長「先ほど、まがねふく吉備の話が出ました。高校の校歌にも使われていますね。本来は真金です。から鉄じゃないですね。くろがねが鉄です、しろがねが銀です。まがねは金ですよ。では、金を吹くってどいうことでしょうか。ふくっていうのは、吹くふくじゃなくって、葺きのふくです。葺きは覆うという意味。まがねふくということは、金で覆うということです。金銅仏っていうものは青銅で仏像を作ってそれに金メッキをしています。古代の金メッキ法はどうやっていたと思いますか。金は水銀に溶けまじります。水銀は液体状で、水銀を取り出してきて、それに金を温めて溶かして、水銀と金の合金を作る。それを金銅仏に塗ったら青銅の仏像の表面に塗っていくのです。表面が水銀と金の層で覆われます。それを火で熱すると水銀は蒸発しますから、金だけが残りという古代における金メッキ法です。今の言葉で言う水銀アマルガム法といいます。これが本来のまがねふくということ。まがねふくは、鉄の産地の枕言葉じゃなく、まがねをふくもの、すなわち水銀の産地の枕詞なのです。

さきほど話にありました。まがねふくは万葉集の歌が一番古いです。まがねふくは吉備ではなく、御笠の山に丹生という水銀の産地があって、そのことです。

真金ふく御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ、というのが万葉集の歌です。それを平安時代に一条天皇が本歌取りして、真金ふく吉備って言ってしまったのですよ。真金ふく吉備って、吉備に金も銀も水銀も出ないですね。後世の人が無理やり、吉備の枕詞に理由を後付けするために、鉄の産地だからまがねふくの鉄としたようです。

多分、一条天皇はまがねふく吉備と言ったのは、吉備の穂って黄色いでしょう。その類で言ったのでしょう。天皇が歌に読んでしまっただけで、それが古今集に載った。契沖というお坊さんが、この歌の真金ふく吉備っておかしいけれど、まがねふく吉備は吉備の穂、植物の穂が真金色をしているから天皇がそう読んだのかもしれないことを書いて古今集の中に入れてしまった。それで古今伝授にもそれが入って、それでまがねふくが吉備の枕詞になってしまった。だから鉄がまがねって違うのですよ。校歌の中で使っているのも正式には違っているということですが、それを言うとな怒られてしまいうすね」

11:10 ^{ゆきえ} 靱負神社

備前長船刀剣博物館近い神社で、高原宮司よりお話を伺いました。

高原宮司「おはようございます。本日はようこそ靱負神社にお越しをいただきまして誠に恐縮でございます。靱負神社というと、まず漢字が読んでもらえない。難しい漢字ですが、弓の矢を入れていた箱のことを靱(ゆぎ、または、ゆき)といいます。それを背負われた神様ということで靱負神社といいます。元々、もう少し向こうの舟山という小高い山があるのですが、そちらの上におられました。この場所はもともと天王社(てんのうしゃ)と呼ばれていました。カーナビでここを引くと長船古戦場というふうに出てくるみたいですね。古戦場巡りの方が何人か来られました。ところが、本当の古戦場ってどこだったのかと言われてもこの辺かなというくらいでしかわかりません。吉井川の流れがもっともっと昔は博物館の南を通っていたのですね。この辺がいわゆる湿地帯、平地の古戦場で、おそらくその中のお社がこちらにあったと思われまます。ただし昔からこの辺一帯は全部靱負の郷だったようです。長船刀剣博物館の目の前にちょっと小高いところがあったと思いますが、あの辺も今でも靱負神社の境内地という形になっています。ということは、昔はこの辺一体がいわゆる境内地ということで靱負神社が中心としてあったのでしょう。



高原宮司 その昔、こちらに天王社があって慈眼院さんがあって、もうずっとこういう形で成り立ってきたのがこの地域です。靱負神社案内図を見ていただくと最初にこの御祭神を三神書いています。まず天忍日命様。この方は古来、天孫降臨で瓊瓊杵尊様が天上界から地上界に降りて来られるときに警護と道案内なされた神様のお1人です。猿田彦様などは今も有名ですけれども、道案内をされた方のお1人に天忍日命様がおられます。

それから天目一箇神様で、天の一つ目の神様と書きます。この方は神代の時代、神様世界の中で刀を作られた神様だといわれています。

刀を作るということはお承知のように火花が飛んできます。その火花によって片目を失われたということで、一つ目の神様と書いて天目一箇神様。以来、古来から刀鍛冶の方々のご信仰であるとか、それから目の神様であるというご信仰があります。

僕がこちらの宮司になった時は、この壁一帯に半紙で大きくひらがなで“め”と書かれたものが大量に貼られていたのです。今は整理してスモールサイズにしています。目を病まれた方々のご信仰という形ですね。民間信仰であるといえればそれまでですが、昔から目は大切。足利尊氏が九州へ行かれるときに、備前福岡に1ヶ月間滞在されました。目を病まれたときにこちらでご祈願されたら、たちどころに治ったそうです。2回こちらへ来られていますけれど、戦勝祈願してその戦にも勝ったそうです。そしてこの境内地の中にある天王の杜の松を植えられた。これは九州からこちらの方に持ってこられた日向松です。300本弱ありますが、なかなか管理が難しい。樹幹注入してもらって維持しています。それと、昔はこの周辺全部田んぼだったので問題なかったのですが、今はお承知のように全部住宅地になっていますので、向こうへ伸びているのは危ない。もしものことがあると困るので何本かは切らせていただきました。そのような管理をしている天王の杜の松林の由来です。天王と言ったら第10代の崇神天皇のことで、第10代崇神天皇様を主祭神の御一人としてお祀りをしています。僕よりも上の高齢者の方々はお靱負神社と言うより、天皇様だ、天皇社だと今でも言われていますね。

高原宮司 どうして第10代の崇神天皇様かというと、第10代の崇神天皇様からが、いわゆる人間天皇であったと言われていました。ではなぜここ長船のような僻地に天皇様に関わるのか。きっと、ここは古来より刀を中心とした産地といいますか、そういったその素地があったところだったのでしょうか。まだ混沌とした世の中です。第10代の崇神天皇さまの御代というのは混沌の世の中で、やはり全国から見てもここは重要なところだったと思うのです。武器としての刀ができるという場所ですから、きつとこちらにご滞在の時があったのだと思いますね。ですから、帰られても崇神天皇様をこちらの地域の方々が慕ってお祀りをしたのでしょうか。そうして天王の杜といいますし、天王という地域名も残っています。今お話した主祭神として3人の方々がお祀りされているのが、この鞆負神社です。

刀にまつわることで非常に有名なお宮さんですけれども、僕が就任した当時はまだそんなに鞆負神社が、とは言われておらず、ここにお宮さんがあることも皆さん知らなかった。瀬戸内市さんが山鳥毛という国宝を買うという発案をされてからですね」

武久市長「彼は当時の副市長ですからね」

高原宮司「はい。当時、僕も行政の方におりました。市長もどうしようかという不安が表れた時もありましたね」

「きっと、山鳥毛がこちらに帰ってきたいと思ったならば、帰ってこられるでしょう。帰りたくない、長船には帰らないよと山鳥毛が思ったらどんなことしても返ってきませんよ、それでも市長よろしいかと言ったら市長は“やろう”と。そのときの決断はすごかったですね。ご承知かどうか、賛否両論の世界ですからね。どうしてそんなところにお金を使うのよというご意見もあります。全国皆さんからご寄附をいただいているから、行政の、瀬戸内市の財政を圧迫するわけじゃないとどんなに説明しても、いやいやそれならば子育てに使ってとか、この道路直してと言われる。それもわかります。反対派の方々との交渉も市長を出したら最後ですから、最初はこちらで色々と動き回りました。



高原宮司 最初の頃は低調でしたね。市長もテレビに出だし、皆さんいろんなところで啓発活動をされました。PR活動もされました。市職員さんが作戦を練られてあれしてみようこれしてみようという動きで、徐々に徐々に高まりを見せてきた。

最終的には一口佩刀ですよ。あの一口佩刀というものが出されて、全国のお刀好きの方々が協力してくれた。そこで大きな歯車が動き出した。そこからのスピード感はすごかったですね。ものすごく早い段階で早いスピードで歯車が回った。そして結果的には、5億円というお金以上のものが集まって、山鳥毛が帰ってこられた。

皆さんも山鳥毛を見られておわかりになったでしょうが、素人の私が見ても絶対に忘れない刀です。あの刃文の特徴。国宝ってご承知のようにたくさんあります。そのうちの半分は長船から出ている刀ですけど、やっぱり唯一無二ですよ。唯一無二の刀が、あの山鳥毛だと思っています。

山鳥毛がここへ帰ってこられたから、ワーンと全国から皆さん方が来てくれる。そうすると、この道にもいろんな人たちがたくさん行き来をされるわけです。そこでこの鞆負神社もいわゆる全国区といいますか、皆さん方に知っていただくことになりました。本日、慰霊祭をしている慈眼院さんも同じくですね」

高原宮司「ここも少し綺麗になりましたけれども、前は半部(はしとみ)から風がどんどん通るようなお宮さんだった。ですが、山鳥毛が帰ってこられて、どんどん人が参られるようになった。この1年2年3年と経つうち、この地域そのものも変わってきたのです。私らも何とか地域作りをしようよというグループが出てくるようになった。すごいと思いませんか。それが自然発生的に出てくるのです。山鳥毛って全国から人を集めるし、地域を動かすのだな、と。それをここで生々と感じました。刀剣博物館の正面なんて当時は荒れていたのですが畑やその周辺が綺麗になった。そこでお芋を作って、子供たちを集めて芋掘り大会しようというグループなどもできた。

高原宮司「そういうグループの一環として出来上がったのが、今回見ていただく神前打の刀を復活しようという動きです。それが地元の方の発案で、実行委員会を立ち上げられたのです。なかなか神前打を作ろうなんていう発想はできないですよ。それが、自分たちでもやってみようと調べることになる。大正14年以來ですから、97年ぶり、約1世紀経っているわけです。1世紀経って、復活させていこうということになった。すごいなと思いました。

川島一城さんという刀匠に依頼をして、昨年11月にそこへ仮設の火床を作っていただいて、そこで玉鋼を御神前から降ろさせていただいて打ち始めの式をしました。そこから今年の8月になって焼入れの式もしました。ご承知のように焼き入れは本当に瞬間的です。真っ赤に焼けたものを水につけて、そこでどういうものになっているか、というもの。そのとき、川島さんがニコッと笑われた。これは素晴らしいものができたなという感じがしました。今この中におられますけれどもうちの総代でもあり、研ぎをずっとされている先生に研ぎをお願いして、出来上がったものを先週12月2日こちらにご奉納していただきました。これは感動しましたね。実行委員長の方から私にお刀をいただいたときにうるっときました。それだけみんなの思いがかかっているのです。奉納刀というのはいろんなお宮さんにもあると思います。ただし、神前打の刀であるところが決定的に違うものです。これは神様への純粋な気持ちでお供えをするものでありますので、絶対外に出ない刀になります。それが100年ぶり、1世紀ぶりに復活したということも、元々は山鳥毛が瀬戸内市に帰ってこられたからできたことです。



ものすごいと思います。これだけ人が動く、地域が動かされる。人の心を動かすこと。これが山鳥毛の力だと思うのです。全国から来られる若い女性の方、彼女らはものすごく勉強されています。僕が最初説明した頃、それは違いますよ、こうですよとぱっと教えてくださる。それだけ勉強なさっています。刀剣を好まれている方々って、本当に専門的なものまで含めて刀がお好き。だから皆さんに言うのです。まずは刀好きになってくださいと。それからもう一步進めて、できれば本物の刀、お守り刀でいいのですが一振りでもいいから持ってくださいと。やはり刀とは、いわゆる昔から邪気を払うというところもあり、自分が元気ないなというときにその刀の重さを感じていただいて、それで元気をもらう。そういうところでできれば持ってくださいねとお願いをしています。

今年はこの12月の特別展示に合わせて奉納刀の展示になったのですが、また来年からは夏に展示でしょうか。夏夏の暑い中でもたくさんの方に来ていただける。非常にありがたいなと思います。あれだけ暑い中を皆さん来てくださるのは、刀がそれだけの魅力を持っているからだと思います。本当にありがたいと思っています」



★記念撮影★

神社前で、おなじみとなった「人」文知ポーズ！



12:30 長船サービスエリア 昼食、対談

なんと、宇喜多秀家公がサプライズ参加。みなさん嬉しそうに記念撮影されていました。

昼食後、谷一林原美術館長と武久瀬戸内市長の対談を行いました。

市長からこの度の人文知応援フォーラムの探訪企画に、瀬戸内市が誇る「刀剣博物館」を選んでくれたお礼の言葉から始まり、山鳥毛が里帰りするにあたってクラウドファンディングをした経緯や賛否両論あったなかで、市民の声を聴きながら進めた苦勞を、谷一館長と振り返りました。

クラウドファンディングをしたことで、市民の意識が変わり市外からも協力してくれた方々の応援が、今もつづいている事や郷土愛に目覚めた人たちが繋がり、今は宇喜多直家、秀家の歴史学習や大河ドラマの実現に奮闘している模様なども語りました。

対談後は、参加者からの質疑も行われました。その中で今後は上越市との交流や現代刀についても力を入れていきたいとのお話がありました。



15:00 行程終了、解散

今回の探訪にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

最後に参加者の方からお一言ずつ感想をいただいて終了となりました。

「瀬戸内市民だったけれど、改めて地元の良さを感じることができた」

「刀を見たことはあったけれどお話を聞いてより一層誇りを持てた」

「文化財を守るということの重要性を感じた」

「当時リアルタイムでクラウドファンディングの達成を見守っていたけれど、その時のドキドキ感や喜びを思い出せました」

など、たくさんの感想をいただきました。

